

# 三重県北中勢地域における「運ぶ」を意味する「ツル」の変化について

余 健

On the semantic change of the verb of carrying *tsuru* in the northern and central areas of Mie Prefecture

Ken Yo

## 要 旨

三重県の北中勢地域出身者への世代間アンケート調査や高年層と若年層への電話調査等に基づき、「運ぶ」を意味するツルが表し得る垂直方向の意味における変化や、ツルの動作に関わる人数において「二人以上で机等を運ぶ際においてのみ使用する」用法から、「二人以上で運ぶ際に加えて、一人で机等を運ぶ際にも使用する」ように、拡張的に変化して来ていることについての考察やそれらの変化の背景にある社会的な要因についての考察を行った。

キーワード：北中勢地域 ツル 使用域 世代差 社会的要因 道具の機械化

## 1. はじめに

ことばが、各地で世代間に渡って、受け継がれていく際には、大きく形や意味（使用範囲）を変えながら、受け継がれていくことばと消失していくことばに分けられる。本稿では、三重県の北中勢地域<sup>1)</sup>に焦点を当て、前者における代表的な表現として、共通語の「運ぶ」を意味する「ツル」を取り上げ、考察する。国立国語研究所（1967a）によると、この「ツル」の使用地域は、ほぼ三重・岐阜・愛知の3県を中心に使用されている東海地方の地域共通語と言える（図1）。

江畑（1995）では、三重県内のほぼ全域において、このツルの使用を確認できる。その使用報告の中で注目されるのは、「机や大きな荷物または、神輿のようなものを2人以上で持ち上げること」と記されている点で、志摩地方の「はよ机つって、のけんかね（早く机を持って動かしなさい）」や北牟婁郡の「ちょっと、つってくれんか（ちょっと、かついでください）」等の例が挙げられている。

また、山田（2008）では、岐阜県と愛知県内の大学生において、『机・いす・長机・オルガン・みこし』を各々持ち上げて運ぶ』の言い方を確認している。その結果、岐阜県と愛知県の尾張地方の両地域内で、共に地域差はあるものの、「机」に対して最も多くツルが使用され、次いで、「いす・長机・オルガン」に多く使用され、「みこし」に対する使用は、最も少ない傾向が示唆されている。ただ、「神輿をツル」や「みこしつり」という表現は、岐阜市とその周辺地域における使用が、ある程度確認できる。

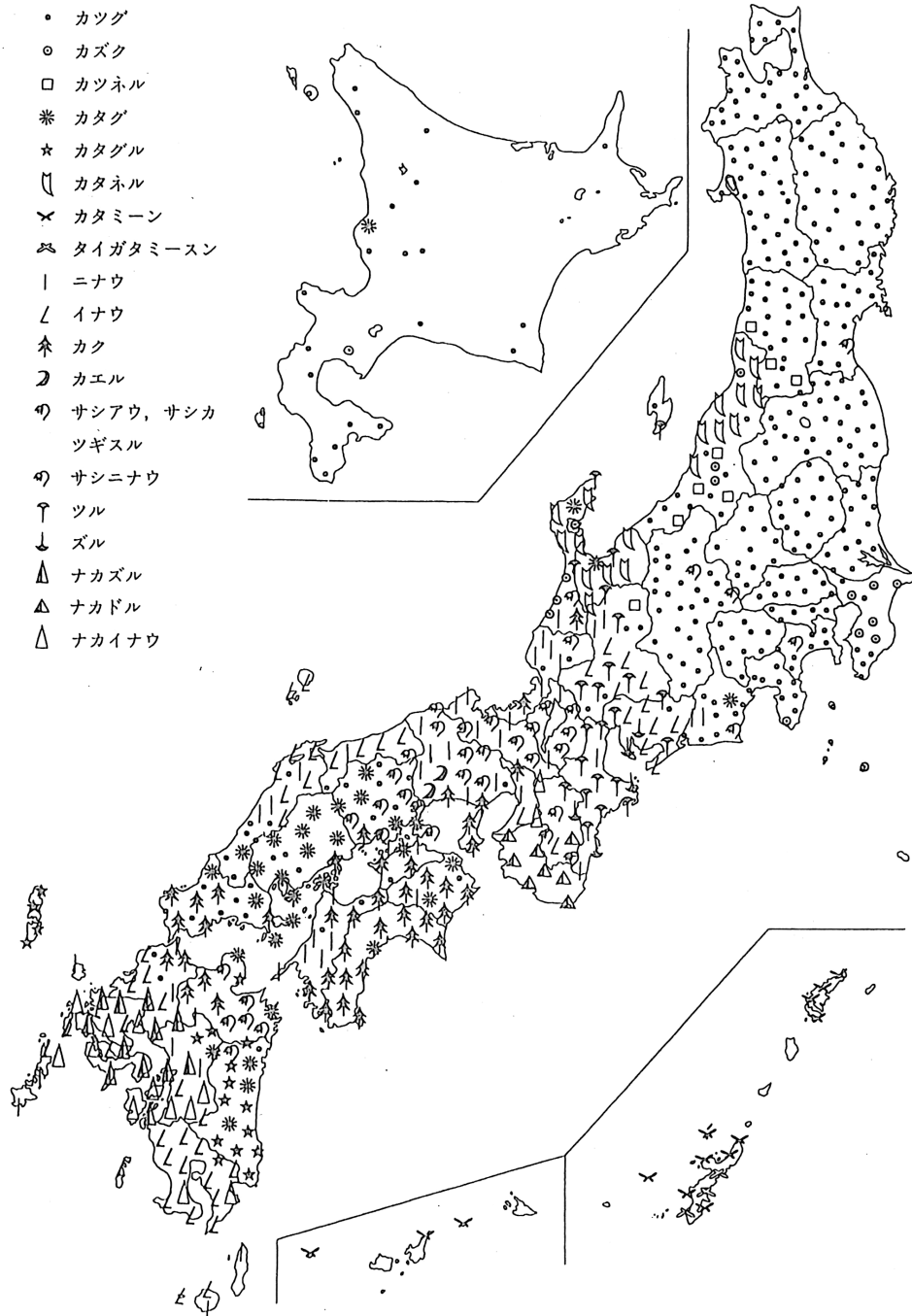
江畑（1995）と山田（2008）に基づくと、かつての三重県の全域や最近の岐阜県の岐阜市を中心とした地域におけるツルの垂直方向における使用範囲は、「肩の上から足元まで」であると言えそうである。

さらに、中川（2013）では、四日市市南部地域における方言調査の結果に基づき、「机を運ぶ」の意味で「机をツル」という表現を高年層では、「二人で机を運ぶときしか用いない」人が多いのに対し、若年層では「一人でも二人でも机を運ぶときに使う」という世代差が確認され得る可能性を指摘している。

上記の一連の先行研究を受けて、本稿の目的は、以下の三点である。一点目は、北中勢地域を中心とした三重県における、ツルの意味における垂直方向の使用域はどこからどこまでなのか、またその使用

域は、世代間でどのように変化しているのかを確認することである。二点目は、北勢地域を中心とした三重県における、ツルで表される動作に関わる人数は、世代間において、「二人以上の時のみ使用する」のか、または「二人以上の時に加えて一人の時にも使用する」のかによる相違の有無を確認することである。三点目は、一点目と二点目における世代間の相違点の背景には、どのような社会的な要因があるのかについて明らかにすることである。

以上、三点が本稿の目的である。



(図1) 「二人で担ぐ」の日本言語地図 (佐藤 2002)

## 2. 調査について

### 2.1 話者情報

三重県北中勢地区の「ツル」の垂直方向と関わる人数における使用域の変化を確認するために、その出発点の特徴として、代表して 2009 年に方言調査で協力頂いた四日市市水沢地区の高年層 3 名の方に、焦点を当てた（表 1）。また、国立国語研究所（1967a）や余（2013）で「ツル」の使用が共通して確認されている三重県内において、桑名市から松阪市までの三重県北中伊勢地方の出身者 206 名に焦点を当て、アンケート調査を実施した（表 2）。

206 名は、いずれも四日市市立水沢小学校の保護者の方である。表 2 は、その出身地の内訳を表し、表 3 は、世代別の内訳を示している。

（表 1）電話調査協力者の情報

	年齢	性別
M	79	男性
S	81	男性
K	83	男性

（表 2）アンケート調査協力者の出身地の内訳

話者の出身地	人数
桑名市	2
いなべ市員弁町	1
員弁郡東員町	2
三重郡菰野町	6
四日市市	165
鈴鹿市	15
亀山市	8
津市	6
松阪市	1
合計	206

（表 3）アンケート調査協力者の年代の内訳

年代	人数
10・20 代	11
30 代	60
40 代	67
50 代	17
60 代	36
70・80 代	15
合計	206

### 2.2 調査項目

#### （1）水沢地区高年層対象電話調査

2009 年に方言調査で協力頂いた方の中から 3 名の方に、2017 年 12 月に以下の 4 項目について電話にて確認調査を行った。

- ①一人で、天びんを前後に下げて運ぶことを何というか。



（図 2）一人で天びんを担ぐ図

②二人で、天びんを真ん中に下げて運ぶことを何というか。



(図3) 二人で天びんを下げる図

③2人以上で、天びんを使わずに、丸太を肩にかついで運ぶことを何と言うか。



(図4)「4人づり」のイメージ

④おみこしをかつぐことを何というか。

## (2) 北中勢地域におけるアンケート調査

2016年12月から2017年の1月にかけて、四日市市立水沢小学校の保護者の方、206名を対象に以下の2項目に関するアンケート調査を実施した。

①普段、机を2人以上で、運ぶ時にツルを使いますか。

②普段、机を1人で、運ぶ時にもツルを使いますか。

### 3. 調査結果と考察

#### 3.1 ツルの垂直方向における使用域の変化に関する調査結果と考察

(表 4) 水沢地区高年層・電話調査の結果

①一人で天秤を前後に下げて運ぶ言い方 (図 2 参照)		②二人で天秤を真ん中に下げて運ぶ 言い方 (図 3 参照)	
M	イナウ・ニナウ	M	ツル
S	ニナウ	S	ツル
K	イナウ	K	ツル

③二人以上で丸太を肩に担いで運ぶ言い方 (図 4 参照)		④みこしを担ぐときの言い方	
M	ツル	M	カツグ
S	ツル	S	カツグ
K	ツル	K	カツグ

表 1 (2.1 節) で示した水沢町高年層 3 名における回答は、表 4 で示すような結果となった。この表から、水沢地区においては、元々、二人又は二人以上でより重い物を運ぶ②や③の場合にツルを使用し、一人で、より軽い物を運ぶ①の場合には、ツルを使用しなかったことが確認できる。また、ツルで示される下から上への垂直方向への動きにおける、以下の考察の出発点となる伝統的な使用範囲については、「肩の上にカツグ位置」から、「天びんで真ん中につり下げる足元の位置」までを想定し得る。前出の山田 (2008) で、岐阜市とその周辺地域においては、「神輿をツル」の「神輿」のように肩より更に上の位置にある物を運ぶ際にもツルを使用できる地域が確認されているが、四日市市水沢地区の高年層においては、「ツル」で表される下から上への水平方向における上限位置は、「肩」までであることが明らかになった。表 4 の②において、K 氏からは、「天びんで (二人で) ツロか」のように使用すると報告があった。また、表 4 の③においては、M 氏からは、「4 人で丸太を担いで、運ぶことを『4 人ヅリ』」と言う。水沢地区では、かつて広く使用されていた」との報告を受けた。

国立国語研究所 (1967b) では、表 4 の②の「ツル」を使用する地域で、「二人で、材木を担ぐ場合には、どう言うのであろうか。やはりツルなどを使うのであろうか」と疑問を投げかけられているが、本電話調査の確認において、表 4 の③の結果や上記で③に関する上記の M 氏からの指摘に基づき、「二人以上で、材木を肩に担ぐ場合に『ツル』を使用する地域がある」ことが今回の調査で確認された。図 1 を今一度確認してみると、ツルは、ほぼ三重県全域で、その使用が確認されており、かつては、北勢地域において、四日市市水沢地区以外でも材木等を肩にかついで運ぶ行為にも「ツル」を使用できた可能性が想定され得る<sup>2)</sup>。

また、念のため、2018 年 10 月に、三重県在住 (北中勢地方含む) で、普段、机等を運ぶ時には、ツルを使用する 20 代前半の三重大生、男女数人ずつに対して、「肩に丸太等を載せて運ぶ時に、ツルを使えるか否か」を尋ねたところ、全員から「肩に乘せることはカツグで、ツルは使わないし、周囲でも『肩で荷物をツル』のような言い方を聞いたことがない」との回答を得た。先の注書きの 2) における四日市市在住の 60 代の方のコメントも踏まえると、現在の北中勢地方を含む三重県内の少なくとも 60 代以降の世代における大部分の人たちは、「肩に荷物を載せて運ぶ行為」に対して、ツルは使用しない、ものと判断して良いであろう。

なお、1章で触れた江畑（1995）の指摘や上記の水沢地区高年層3名の回答からも、北中勢地方を含む三重県内において、ツルで意味する下からへ上の垂直方向における使用域は、70代以上の世代の「肩の上から足元まで」から60代以下の世代の「肩の下から足元まで」に変化したと捉えて、ほぼ良さそうである。

### 3.2 北中勢地域におけるアンケート調査の結果と考察

#### 【質問項目】

- ①普段机を2人以上で、運ぶ時にツルを使いますか。 1：使う 2：使わない  
②普段机を1人で、運ぶ時にもツルを使いますか。 1：使う 2：使わない

表2、3（2.1節）で示した三重県北中勢話者206名におけるツルの伝統型の回答パターンは、表5に、新型の回答パターンは、表6にそれぞれ示されている。また、表5、6をグラフ化したものが、図5と図6である。まず、ツルの伝統型の回答パターンとは、上記、質問項目①の回答「1：使う」と質問項目②の回答「2：使わない」を組み合わせた回答パターンのことである。つまり、「普段、二人以上でないと運べないより重い、或いはより長い机を運ぶ時には、ツルを使用するが、一人で運べるより軽い、或いはより小さい机を運ぶ時は、ツルを使用しない」という回答パターンである。

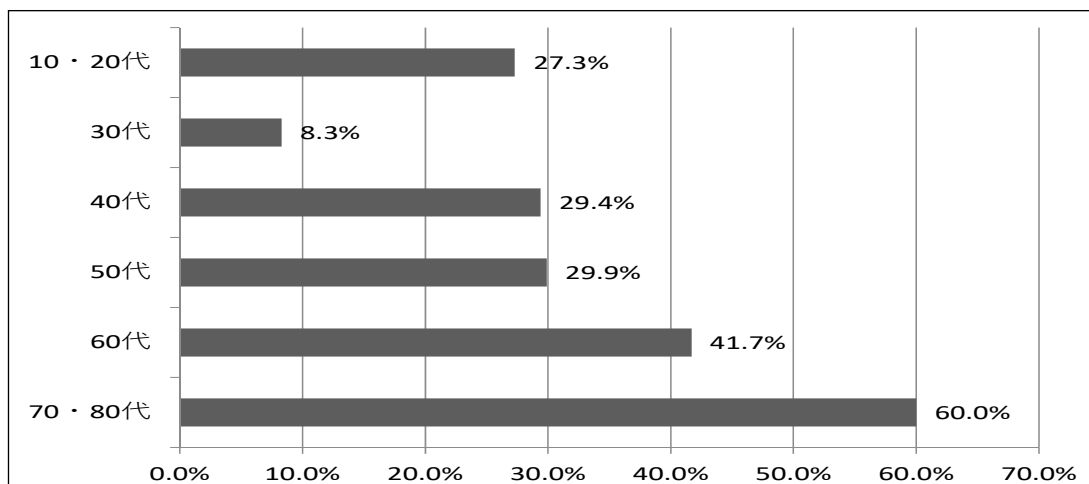
つぎに、ツルの新型の回答パターンとは、上記、質問項目①の回答「1：使う」と質問項目②の回答「1：使う」を組み合わせた回答パターンのことである。つまり、「普段、机を運ぶ時に、二人以上でないと運べない机の場合も、一人で運べる机の場合も共にツルを使用する」という回答パターンである。

（表5）北中勢地域出身者における世代間の  
伝統型回答パターンの推移

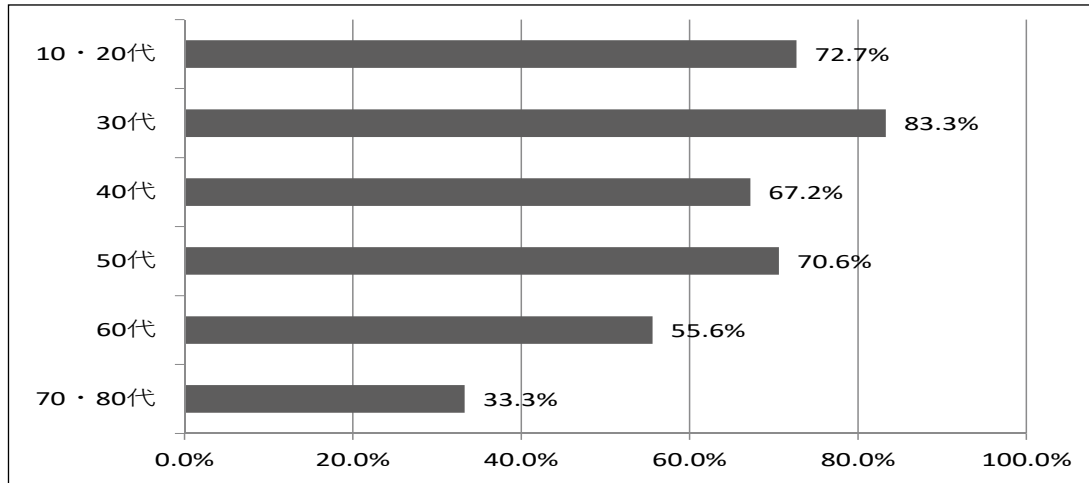
伝統型(1・2)	人数	割合	総人数
10・20代	3	27.3%	11
30代	5	8.3%	60
40代	20	29.9%	67
50代	5	29.4%	17
60代	15	41.7%	36
70・80代	9	60.0%	15
総人数	57	27.7%	206

（表6）北中勢地域出身者における世代間の  
新型回答パターンの推移

新型(1・1)	人数	割合	総人数
10・20代	8	72.7%	11
30代	50	83.3%	60
40代	45	67.2%	67
50代	12	70.6%	17
60代	20	55.6%	36
70・80代	5	33.3%	15
総人数	140	68.0%	206



（図5）北中勢地域出身者における世代間の伝統型（1・2）回答パターンの推移



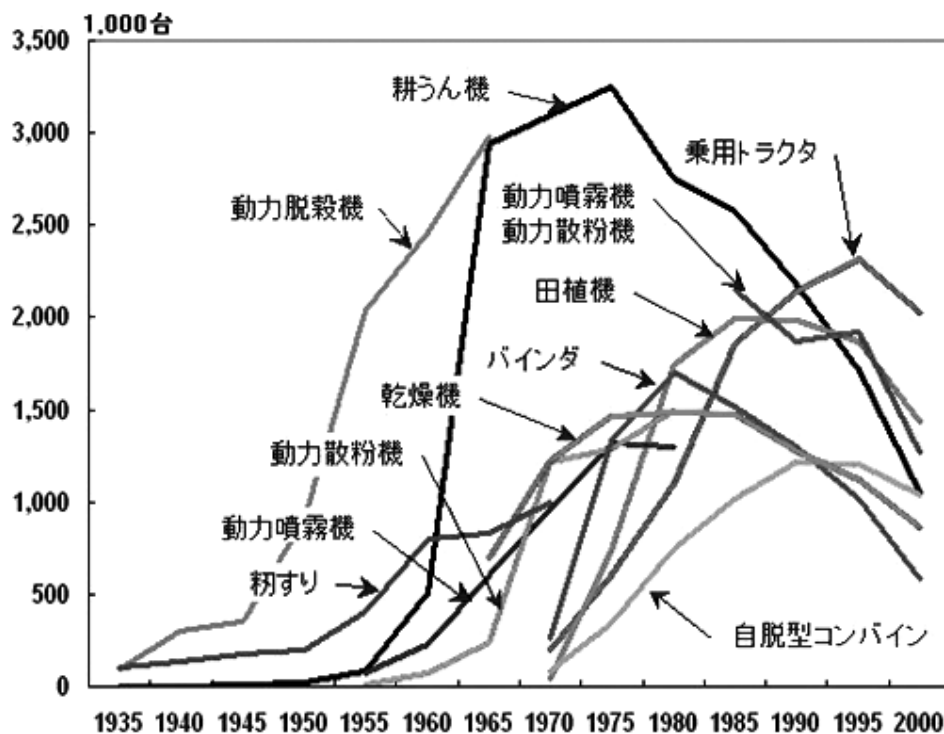
(図6) 北中勢地域出身者における世代間の新型(1・1)回答パターンの推移

図5における伝統型の回答パターンの使用率は、70代以上で60.0%と最も高く、50代で41.7%、50代以下においては、約30パーセントと使用率が下がっていく。これに対して、図6における新型の回答パターンの使用率においては、図5と相補的に、70代以上で、33.3%と最も低く、世代が下がるにつれ、回答率が上がっていき、30代でピークの83.3%、20代以下も72.7%の高回答率を示している。

この傾向は、前出の中川(2013)で触れられていた予想、すなわち「机をツル」という表現を高年層では、「二人で机を運ぶときしか用いない」人が多いのに対し、若年層では「一人でも二人でも机を運ぶときに使う」という世代差が確認され得るとの可能性を裏付けている結果であると言えよう。つまり、三重県北中勢地方における「運ぶ」を意味する「ツル」は、本来的な「二人以上でないと運べない、より重厚な机等の対象物を運ぶ」の意味に加えて、「一人でも運べる、より軽めの机等の対象物<sup>3)</sup>を運ぶ」意味をも担えるように、その意味範囲を拡張してきている、と言える。ここで、本稿の実際の調査項目における対象物は、「机を運ぶ時」のみの質問項目しか尋ねていないが、その意図としては、日常の様々な場面における「机」について尋ねているので、上記で確認されたツルの意味拡張は、机以外のある程度の重みのある他の対象物を運ぶ際にまで、敷衍して考えて問題ないものと考えられる。

以下では、伝統型と新型の回答パターンにおいて、なぜ、上記のような世代間の推移の相違が確認されたのか、考えてみたい。この点については、伝統型の7、80代の回答率60.0%のみ(図5)が、新型の7、80代の回答率33.3%(図6)を約2倍上回っているのに対して、他の60代以降における全ての世代においては、伝統型(図5)より新型(図6)の方の回答率が高くなっている点に注目したい。それは、7、80代と60代以降の世代間における社会的な環境の大きな違いに帰結するものと考えられる。7、80代は、戦前から戦中の生まれであるのに対して、60代以降の世代は戦後生まれである。つまり、三重県北中勢地域でも広く現在も盛んに行われている稲作に関わる農業機械の普及状況を図7で代表的に確認してみると、7、80代が生まれた1930年代や1940年代は、機械化がほとんど進んでいない状況が確認される一方で、60代が生まれた頃の1955年頃から急激に機械化が進み始めた状況が確認される。

さらに言い換えると、高度経済成長期の開始と重なる60歳代が生まれた頃の1955年以降、農業機械のみならず様々な分野の道具の機械化が進行していくにつれ、機械化が進むまでは、二人以上の人手で重いものを「ツッテ」いたところが、次第に人手で「ツル」必要性がなくなっていった経緯を想定できよう。図5の伝統型における7、80代の回答率(60.0%)から60代の回答率(41.7%)に大きく減少した背景に、その契機が、見て取れる。



(図7) その機械の普及を年代別に見ていくと (一般社団法人日本農業機械工業会 HP) より

#### 4. まとめ

北中勢地域を中心とした三重県では、ツルの下から上への垂直方向における使用域は、かつての「肩の上から足元まで」から「肩の下から足元まで」に変化したことが、高年層と中・若年層の世代間における電話等の確認調査に基づき明らかになった(3.1節)。また、世代間のアンケート調査に基づき、三重県北中勢地方における「運ぶ」を意味する「ツル」は、本来的な「二人以上でないと運べない、より重厚な机等の対象物を運ぶ」を表わす意味に加えて、「一人でも運べるより軽めの机等の対象物を運ぶ」意味をも担えるように、その使用域(意味範囲)が拡張されてきていることも確認できた(3.2節)。つまり、ツルの使用域(意味範囲)は、かつての「肩の上から足元における垂直方向の範囲で、二人以上でしか持てない重い物」を運ぶという使用域から「肩の下から足元における垂直方向の範囲で、一人で持てる軽めの物から二人以上で持てる重い物まで」を運ぶという使用域へ拡張的に変化している途上であると言える。

この変化の背景にある要因としては、農業を始めとする様々な分野での道具の機械化という社会的な要因を挙げられる。クレーン等の機械が開発されて、非常に重い物を複数の人手で運ぶ必要性が薄くなったことが、北中勢地方を中心とした三重県において、「二人以上で重い物を肩でツル(かつぐ)」という表現の消滅につながっていったのであろう。

#### 5. 今後の課題

本稿の特に、北中勢地域で行ったアンケート調査では、持ち上げて運ぶ対象として、「机」に焦点をあてた結果に基づき、他のある程度、重みのある対象物を運ぶ際にも敷衍して考察を進めた。しかし、特に若年層(大学生)においては、「机と椅子限定(或いは机限定)」で「ツル」を使用する、というコメ



ントも確認されている。今回の調査において、少なくとも「机をツル」の表現自体は、使用域を拡張的に変化させながら、高年層から若年層に伝承されていることが確認されたが、どこまでの対象物を「ツル」と表現できるかにおける世代間の相違点や、机や椅子に限定してツルを使用する場合のそれらの重みや大きさの違いによる、ツルと運ぶ等の使い分けに関する状況等については、今後、改めて確認される必要があろう。

## 注

- <sup>1)</sup> ここでいう三重県北中勢地域とは、「桑名市・いなべ市員弁町・員弁郡東員町・三重県菰野町・四日市市・鈴鹿市・亀山市・津市・松阪市」の北勢地域から中勢地域までを指している。
- <sup>2)</sup> 2018 年 10 月に四日市市出身で在住の 60 代の方に確認したところ、「肩にツッテ行こか」という表現について、聞いてみて違和感のある表現のように感じないが、現在は、機械で運べるので、実際にはそのような表現を使う機会が無い、とのコメントを頂いた。
- <sup>3)</sup> 軽めの対象物といっても、簡単に一人で持てる物（パイプ椅子等）には、「ツル」は使われにくいようだ。一人で両手で持ち上げた時に、しっかり重みを感じられる物（小学校にある机や椅子等）に「ツル」が使われる傾向が強い。

## 引用文献

- 江畑哲夫（1995）．三重県民俗語集覧 4 私家版，1018-1019.
- 国立国語研究所（1966）日本言語地図解説 一方法一，国語研究所，129.
- 国立国語研究所（1967a）日本言語地図第 2 集，国語研究所，66-67.
- 国立国語研究所（1967b）日本言語地図解説 一各図の説明 2—，23-24，国語研究所.
- 佐藤亮一監修（2002）お国ことばを知る 方言の地図帳，小学館，137.
- 中川恭輔（2013）四日市市南部（水沢地区～河原田地区）の語彙 28～30 机をつる（二人以上）、机をつる（一人）、あぐら，余 健（編）四日市市・内部川沿いの農業地域における言語表現の豊かさの解明と教材開発，三重大学教育学部，1-3，60-61.
- 山田敏弘（編）（2008）．ぎふ・ことばの研究ノート 第 7 集 岐阜と愛知の方言地図集，岐阜大学国語教育講座，51-54.
- 四日市市（1993）四日市市編さん調査報告第 4 集 水沢三本松町の民俗，26-30.
- 余 健（2013）．名古屋市一田辺市間における「運ぶ」「盛る」「小さい」「細かい」の分布 岸江信介 太田有多子 中井精一 鳥谷善史（編著）都市と周縁のことば 紀伊半島沿岸グロットグラム，和泉書院，215-222.
- Hakosuka（2007）新しい「農」のかたち <http://blog.new-agriculture.com/blog/2007/06/271.html>（2007 年 6 月 17 日）
- ブログ長崎の諏訪神社の大祭 (<https://plaza.rakuten.co.jp/hamabira/diary/201809040000/>) より：最終更新日 September 3, 2018 06:30:58 AM

（謝辞）四日市市立水沢小学校の片岡 博校長先生を始めとする先生方、児童の皆さん、保護者の皆様、坂 正春先生、四日市市教育委員会（当時）の坂下亮介先生には、水沢小学校の児童や保護者の方における面接調査やアンケート調査に加えて、その後の授業実践等でも大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。